献　呈　の　辞

九州産業大学商学会は、平成18年3月末日をもって定年退職される石原定和教授、田原榮一教授の両先生のご功績を讃えるために『商経論叢』の記念号を編集し、商学会ならびに商学部に対するご貢献に感謝の意を表し、両先生に謹んでお贈りいたします。

石原教授は昭和34年に大阪市立大学大学院経済学研究科修士課程を修了され、その後、財団法人日本証券経済研究所専門研究員を経て、同42年4月に小樽商科大学商学部助教授として大学での教員生活を始められました。昭和56年同大学教授となられた後、同63年4月神戸大学経営学部教授に就任されました。そして平成7年4月に九州産業大学商学部教授として赴任してこられました。

先生は英米の制度や法規制の研究から自己金融進展下の株価高騰の意義を解明しようとされ、二度にわたってミシガン大学に客員研究員として留学されました。そこでの研究をもとにさらに戦後日本の証券政策の展開過程に検討を加えるという日米の制度および政策の比較研究に一貫して取り組まれ、その研究成果の一端を『戦後証券市場の構造分析—高度成長期よりスタグフレーション期へ—』『米国証券市場の変貌と証券政策』等の研究書に纏められました。九州産業大学での最終記念講義では「ビジネス・ファイナンス」のテーマで話をなさいましたが、ご自身の50年にわたる研究の軌跡を振り返りながら、研究者・教育者として持つべき姿勢を私たちに示してくださいました。

先生は「証券論」「証券市場論」や「金融・証券理論特殊研究」等の科目を各大学で担当されましたが、いずれの大学においても型破りの関西弁で多くの学生を惹きつけてきたという話を伺っており、ここにも先生のお人柄が窺えます。また趣味の世界になってしまいますが、ジュニア時代より硬式テニスの選手として活躍され、現在もラケットを手にされるスポーツマンであることも知る人ぞ知る先生の隠れた才能でしょう。

私たちはこのような先生のご経験とお人柄に甘え、赴任翌年の平成8年4月より3期6年の長きにわたって商学部長をお願いしてしまいました。さらに平成13年6月から4年間は法人理事としても大学運営上の重責を担ってこられました。ちょうどこの頃から受験人口が急激に減少を始め、また大学設置基準見直し等によって各大学ともにそれまでの大学教育を見直さざるを得ない大改革を求められた時期であっただけに、毎週、大阪から通われた先生のご苦労はいかばかりであったかとお察し申し上げます。また商学とは何かを自らに問い続け、商学部教育についての理論的・実践的意義付けに心を砕かれた先生の姿

に大学人としての心意気を感じるのは私だけでしょうか。私たち教員一同、先生の貴重な時間を学部運営に傾注いただいたことに心より感謝いたしております。

田原教授は昭和33年に神戸大学大学院経営学研究科修士課程を修了され、その後、母校の大分大学経済学部に助手として戻られ、昭和35年講師、同40年助教授、同48年教授に就任され、平成8年3月に大分大学を定年退職されるまで一貫して母校の発展のために尽くされました。先生は交通政策について多くの研究発表をされ、また官公庁や地方自治体等の各種調査委員会やプロジェクトに参加し、実態調査にもとづく報告書を多数発表されましたが、大分大学での最終記念講義では、「交通論研究40年の歩みと21世紀に向けての交通政策の課題」のテーマで、18世紀後半に始まる交通論研究の系譜と交通問題への今後の展望について話されたとお聞きしています。先生は平成8年4月に九州産業大学商学部教授として赴任してこられた後も、このような40年にわたる研究の成果を学部および大学院での講義の中で示してこられました。

さらに先生は九州産業大学就職部長としての要職をこなしてこられましたが、私たち商学部教員にとっては「観光産業学科」を商学部に増設した際に、石原学部長の右腕としてご尽力いただいたことが強く印象に残っています。先生は大分大学在職中から、観光分野の専門家として著名であり、単に理論的研究にとどまらず、湯布院温泉をはじめ、数多くの観光地の町おこしに実際に関わってこられた経験を観光産業学科設置の折に遺憾なく発揮していただけたと深く感謝しております。

観光産業学科はすでに7年を経過し、その間、テロ等の理由から観光不況のあおりを幾度も受け続けてきましたが、それでも観光経営実習のほか、国外国内の観光研修、航空業界実践研究等のユニークで実践的な科目を持つ学科として社会の注目を浴びてきました。これもひとえに実業界に多くの人脈を持つ先生の獅子奮迅のご活躍の賜物と感謝しております。このような先生の最終記念講義のテーマは「観光研究の展開と課題—観光研究50年の軌跡—」であり、19世紀末に始まる観光学研究を歴史的に考察することの重要性を強く指摘されたことは、とかくトピック解説や事例研究に流されがちな近時の研究の傾向に警鐘を鳴らすものとして私たちの胸に響きました。

顧みますと、両先生ともに大学紛争やいわゆる教養部廃止のような大学教育が大きく変わった激動の時代に、それぞれ研究・教育活動とともに役職者としての重責を担われ、それらの経験を九州産業大学においても発揮されました。いろいろな意味で過去に精通された両先生の博識に驚かされたのは私ひとりではないでしょう。私たちが受けたよき指導と薫陶は計り知れないものがあり、まことに感謝に堪えません。

今、九州産業大学を含め多くの大学では、少子化のあおりを受け、経営難とともに学生の学力低下時代の教育の難しさに直面しています。高等教育機関であり、先端研究機関であるべき大学の役割および存在意義自体が問われている現在、商学部の重鎮として活躍された両先生が大学から離れられたことは、大学にとって大きな痛手となりますが、少しでも両先生のご功績に報いるべくがんばる所存でおります。

なお商学部では、両先生とともに、西村明教授、蓑輪靖博教授および佐藤哲哉助教授が本年度を持ちまして退職されますが、先生方には九州産業大学商学部でのご活躍に感謝申し上げますとともに、今後も健康に留意され、益々ご活躍されますとともに、九州産業大学を見守っていただけますようお願い申し上げ、ご挨拶に代えさせていただきます。

平成18年3月

九州産業大学商学会長（商学部長）
高　橋　公　忠